

半世紀後に読む中西進の「宮柁二論」

鈴木 竹志

新元号「令和」の発案者として、巷間に知れ渡るようになった中西進は、「コスモス」創刊時の会員であった。その後、研究活動に専念するために、コスモスから去ったが、宮柁二への敬愛の念は強く、角川「短歌」昭和四十七年五月号に、「宮柁二論―『多く夜の歌』おぼえ書き―」と題する評論を載せている。

この中西進の「宮柁二論―『多く夜の歌』おぼえ書き―」は、いくつかの驚きを与えた。まず第一に長編であること。何と十五頁にわたる評論である。四百字詰め原稿用紙で五十枚強である。歌人ではない、気鋭の万葉学者にこれだけの量の評論を書かせること自体驚きであるが、請われてこれだけの評論をものにする中西もまた大変な情熱と力量の持ち主と言わざるをえない。なお、この号の「編集後記」には、「中西進氏は少壮の万葉学者である。しばらく中断しておられるが、短歌作者でもある。本号では、宮柁二短歌の持つ魅力について、『多く夜の歌』を中心として、論じていただきたい。」とある。これも特例であろう。

さらに驚いたのは、この評論に引用されている歌なのであるが、私が『多く夜の歌』を読んで感銘を受けた歌がほとん

ど出てこない。数十首の引用があるが、ほとんど私の好む歌と重ならない。つまり、中西と私では、評価する歌に決定的な違いがあるのである。なぜこんなにも違うのかをまず考えていきたい。

中西が最初に引用するのは、『多く夜の歌』の最後の一首である。この歌にこそ歌集全体を体現するものが籠められているというのである。

早川のはやき響まみにをのきて目覚めてる
たり眠りがたしも

中西はこの歌の「をのき」に注目したのであるが、その理由を次のように述べている。

その「もの」とは一体何物なのか。あるいは作者は何ゆえに「をのく」のか。そうした深い物思いが私をとらえた時、この歌は『多く夜の歌』の象徴的な相貌を帯びて見えたのだし、この「をのき」の中に、柁二の本質をもの語るものがあると思えたのだった。これを追うことこそ、宮柁二を解くことにちがいない。私は、ある恣意をもって『多く夜の歌』を読んでみた。旅の歌、事件、行事にかかわる歌などをわりに軽く、一方日常詠と

もいふべき、生きていくふとした折に見せた心の断面に、眸を凝らしていった。柀二の「をのき」を追いながら。こう述べた後、中西は「さびし」という語、あるいは「しづけし」という語に注目して、歌を挙げつつ、持論を展開してゆく。多分、私と中西の決定的な相違はこのあたりからすでに始まっているようだ。私は、あまり語に着目するよりは、一首全体を読んでゆくことに重きを置いている。つまり、「さびし」という語にこだわるより、一首全体に醸される「さびしさ」のほうに注目したのである。

例えば、私が『多く夜の歌』でまず注目したのは次のような歌である。

頭をふかく垂るる男の彫刻に对きてをりけり
鳴呼卑しくなし

百鳥の春の遊びを聴かむとししづけき園を
横切りてきぬ

土囲み立ちならぶ墓の中にして権少僧都観
道の塔は低しも

蠟燭を庭にかざせば芽萌えたる萩のひと枝
揺れつつ現はる

この四首は、巻頭詠「灰皿」に続く一連「仲春雑詠」六首中の歌である。断定調の歌が多いが、それが形容詞の用い方によることは歴然としている。ある種の断念を持ちつつ、対象に真向かう姿勢を堅持しているがゆえの断定ではないかと私は考えている。「卑しくなし」「しづけき」「低し」、これらの形容詞によって、これらの歌は息づいているのである。そ

して、断定的になることは取りも直さず何かを切り捨てることであるのだから、そこに「さびしさ」という感情が湧くのは当然のことと言えるだろう。だからこそ、さきほど「ある種の断念を持ちつつ」と述べたが、この「断念」と「さびしさ」には通うものがあることは認めなくてはならないだろう。特に一首目の「卑しくなし」には惹かれてならないのである。こういう歌に魅力を感じた私にとって、中西の選択に領けないのである。しかし、中西は「結語」において、次のように述べている。

以上、宮柀二という歌人がいかなる歌人かを『多く夜の歌』について考えて来た。その結果第一に言えることは、物を物として見ながらそこに生命を感じる詩人であり、この物と生命との関連は常凡の図式を拒否する深層に結ばれたものであつて、その根源には硬質な「ひとり」に迫り抜こうとする厳肅さがあつた。そして彼の生の意識は時間的現在にあつた。

これを一言でいえば、柀二はついに生を歌う詩人だということである。このことを、いわゆる和歌的なものと対応においていいかえてみると、次のようにいえる。

(以下略)

このような指摘については、私も同感である。つまり選んだ歌は異なるにしても、その評価の観点ということになると、さほど違う点はないのである。しかし、この「結語」において、中西は巻末近くに置かれた一連「私記録詠」について、次のように断言する。この断言については、私の考えとは全

く異なるので、その点について述べたい。

この評言を裏がえせば、この一連は短歌として自滅する以外にないということになる。だからこれは否定の評言である。聡明でかつ短歌に心血をそそいで来た柀二（私は柀二の散文も同等に高く評価する）は、この短詩形の何たるかを、十分知っているはずである。近代流行の小説に身を売ることが、しかもいじましく私小説にしかならないのに、それが和歌の蘇生だなどということは、よもや考えていまい。彼は一途に歌を求め、ついに優れた短歌をこの一巻の中に凝集しているのだ。

そして反面、また、徹底した告白的形式が「私記録詠」の注目の理由だとすれば、これまた私のこの一連への感想を肯じてよいように思われる。凜々と張りつめて来た『多く夜の歌』の歌々が、ここに到って陥没するのはこの告白のためである。大体、この一連ほど柀二が肉体を露呈した歌は、他にあるだろうか。「告白」は詩人の潔しとしないところだ。

中西はこのように『多く夜の歌』の「私記録詠」の歌を徹底的に否定するのである。この否定については、私は同意できない。「私記録詠」は、宮柀二が富士製鉄を退社する際に詠まれた一連である。仕事と短歌の両立を断念として、短歌に専念するための大いなる決断をした後、富士製鉄を去ってゆく己の姿を詠んでいるのである。これが単なる告白詠に過ぎないとは到底私には思えない。苦渋なる決断の結果、自分の心象を露わにしたのである。告白などとは全く異なる、歌

人としての生の切り岸にあった自分の生を文学として昇華させんと強い意志によって生まれた作品群なのである。そこを「告白」という一語で切り捨ててゆく中西の論については、到底承服することはできないのである。

さらに言えば「私小説」という文学の在り方に対して、この時期の中西は偏見に近い捉え方をしていたようだが、この令和の時代に到って、近代文学、戦後文学の潮流を振り返ってみれば、志賀直哉を先陣とした多くの私小説作家が成し遂げてきた文学的達成は、評価されこそすれ、否定的対象になるなどということは、決してありえないのである。私小説軽視の姿勢を今日まで中西が堅持しているかどうかについては知る由もないが、客観的な文学史の把握においては、中西の認識はかならずれているとしか思えない。

さて、「私記録詠」の歌を見てゆきたい。果たして中西の言うように「告白」にすぎないのかどうか。

七階の下なる都心としくたまたまを往来絶えし車

道歩道見ゆ

窓そとに鉄骨てつこ見えて日々に成る形象は鉄の

音響持ちき

はげみ来て今は去るべく硝子戸しょうじこに顔当てて

をり硝子は青し

雨負ひて暗道くらみち帰る宮肇君絵を提げ退職の金

を握りて

青春を晩年にわが生きゆかん離々りりたる中年

の泪なみだを蔵くらす

生き生きてわが選びたる道なれど或いはひとりの放恣にあらぬか

「雨負ひて」「青春を」の歌を読んで、中西は告白と見なしたのであるが、今日の視点に立てば、さほど告白的とも思えない程度の告白ではないかと思う。

確かに「私記録詠」への中西の厳しい評価は、宮柀二の歌を愛するがゆえの否定であったことは分かる。しかし、宮柀二作品の多様性が拓かれてゆく端緒として、この告白的な作品群があるということもまた確かなことである。もちろん当時の中西はそういう方向性自体に対して否定的だったのである。つまり、歌としての純粋性を過剰に評価する観点を持つていたのである。

中西は宮柀二の短歌の純粋性をとりわけ評価の軸の中心として考えていたが、私は逆にこの『多く夜の歌』の歌の多様性こそが、この歌集の最も大切な点ではないかと考える。そして、『多く夜の歌』以降の達成の源とも考えてよいのではなからうか。もちろん、この点については、中西が書いた時点では、歌集として存在していなかったのであるから、中西を批判する論拠にはならない。

最後に『多く夜の歌』の歌の多様性を示す歌を挙げる。

腕相撲われに勝ちたる子の言ひて聞けば鳴
きをり簀の梟

はうらつにたのしく酔へば帰りきて長く坐
れり夜の雛の前
わがうちの見悪き悪魔をりをりに笑ひてゐ

たり見てをりき吾は

悲しみを耐へたへてきて某夜せしわが号泣

は妻が見しのみ

方図なくわが妄想裡に現はれて跳躍し跳躍

しげだものら過ぐ

嗚呼さびし憧憬事もさだ過ぎてうづくごと

くは甦りきたらず

自動車の弾みのなかに思ひをり寂しきかな

や水上は常に

馬跳びの子らの遊びを見おろすに馬として

待つ子の背の孤独

父として、夫として、己を晒すかのように見える歌であるが、これらは歌人として真実を詠んでいるのである。父としての真実、夫としての真実、そして、戦争体験者としての真実もまたこれらの歌に詠まれているのである。つまり普遍性を有する歌なのである。だからこそ、今日、これらの歌は輝くのである。そして、この後に続く『藤棚の下の小室』『獨石馬』の世界の先触れとしてあることも間違いない。なお、引用した八首の中で、「わがうちの」と「自動車の」の二首は、中西の論にも引用されている。

宮柀二という歌人の作品の評価ということについては、中西進と私とは、実はそんなに違いはないのかもしれない。しかし、宮柀二の歌の世界の多様性を改めて訴えたいという思いは強く、中西の評論を借りつつ、このような論を書くに至ったことを最後に述べておきたい。